



# 漢方医学教育 SYMPOSIUM 2025

2025年2月8日(土) 15:00～18:30

都市センターホテル

【Web同時配信】

一般財団法人 日本漢方医学教育振興財団  
評議員・理事・監事

【評議員】

評議員	久保 千春	中村学園大学 学長 前 九州大学 総長
評議員	中谷 晴昭	千葉大学 理事
評議員	久光 正	昭和大学 学長
評議員	町田 吉夫	日本漢方生薬製剤協会 常務理事
評議員	伴 信太郎	中津川市地域総合医療センター センター長 愛知医科大学 特命教育教授 名古屋大学 名誉教授
評議員	伊藤 隆	証クリニック 総院長 日本東洋医学会 前会長・監事
評議員	松田 隆秀	聖マリアンナ医科大学 総合診療内科 特任教授

【理事】

理事長	松村 明	筑波大学 名誉教授 いちばら病院 つくば頭痛センター長
専務理事	三瀨 忠道	福島県立医科大学 特任教授 会津医療センター 漢方医学講座
常務理事	瀬尾 宏美	高知大学医学部附属病院 総合診療部 教授
理事	北村 聖	公益社団法人 地域医療振興協会 顧問 東京大学 名誉教授
理事	田妻 進	JR広島病院 理事長・病院長 広島大学名誉教授
理事	小西 郁生	国立病院機構京都医療センター 名誉院長 京都大学 名誉教授
理事	岩瀬 鎮男	滋賀医科大学 理事（総務・財務・施設担当）・副学長・事務局長
理事	木村 容子	東京女子医科大学附属東洋医学研究所 所長・教授
理事	柴原 直利	富山大学和漢医薬学総合研究所 和漢医薬教育研修センター 教授
理事	蓮沼 直子	広島大学大学院医系科学研究科医学教育学 教授 広島大学医学部附属医学教育センター センター長
理事	濱口 眞輔	獨協医科大学医学部 麻酔科学講座 主任教授
理事	山脇 正永	東京科学大学 大学院医歯学総合研究科 教授 臨床医学教育開発学 脳神経内科学
理事	鍋島 茂樹	福岡大学医学部 総合診療学講座 教授
理事	前野 哲博	筑波大学医学医療系 地域医療教育学 教授
理事	高山 真	東北大学大学院医学系研究科 漢方・統合医療学共同研究講座 特命教授
理事	藤岡 利行	日本漢方医学教育振興財団 前事務局長

【監事】

監事	永沢 徹	永沢総合法律事務所 代表弁護士
監事	小澁 高清	小澁公認会計士・税理士事務所 代表

(敬称略・順不同)

< 2025年2月1日現在 >

## 研究助成選考委員会・委員

委員長 (理事)	山脇 正永	東京科学大学 大学院医歯学総合研究科 教授 臨床医学教育開発学 脳神経内科学
委員 (理事)	柴原 直利	富山大学和漢医薬学総合研究所 和漢医薬教育研修センター 教授
委員	長谷川 仁志	秋田大学大学院 医学系研究科 医学教育学講座 教授
委員	平出 敦	明治国際医療大学 保健医療学部 特任教授
委員	小林 直人	国立大学法人愛媛大学 副学長(評価) 愛媛大学医学部附属総合医学教育センター長 愛媛大学大学院医学系研究科 医学教育学講座 教授
委員	伊野 美幸	聖マリアンナ医科大学 医学教育文化部門 医学教育研究分野 特任教授 聖マリアンナ医科大学 総合教育センター センター長
委員	小松 弘幸	宮崎大学医学部 医療人育成推進センター 教授 宮崎大学医学部附属病院 卒後臨床研修センター センター長
委員	間宮 敬子	信州大学医学部附属病院 信州がんセンター緩和部門 教授
委員	大塚 文男	岡山大学学術研究院医歯薬学域 総合内科学 教授 岡山大学病院 総合内科・総合診療科長 / 感染症内科長 / 検査部長
委員	鈴木 朋子	埼玉医科大学 総合診療内科東洋医学科兼任 教授

## 教材委員会・委員

委員長 (専務理事)	三瀨 忠道	福島県立医科大学 特任教授 会津医療センター 漢方医学講座
委員 (理事)	蓮沼 直子	広島大学大学院医系科学研究科医学教育学 教授 広島大学医学部附属医学教育センター センター長
委員	網谷 真理恵	鹿児島大学大学院医歯学総合研究科 地域医療学分野 / 離島へき地医療人育成センター 准教授
委員	新井 信	東海大学医学部 客員教授 聖マリアンナ医科大学 客員教授
委員	佐藤 浩子	群馬大学大学院医学系研究科 総合医療学 准教授
委員	伊藤 亜希	横浜薬科大学 漢方薬学科 漢方治療学研究室 准教授

(敬称略・順不同)

< 2025年2月1日現在 >

# 漢方医学教育 SYMPOSIUM 2025 プログラム

シンポジウム

15:00 - 18:30

## ■ 開会のあいさつ / 表彰式 研究助成・業績表彰 15:00～

日本漢方医学教育振興財団 理事長 松村 明

## ■ 受賞講演 15:20～

座長: 日本漢方医学教育振興財団 専務理事 三瀨 忠道

日本漢方医学教育振興財団 常務理事 瀬尾 宏美

### 奨励賞

#### 「漢方医学教育開発への取り組み～カリキュラム、方略、教材、評価法の開発～」

鹿児島大学大学院 医歯学総合研究科地域医療学分野 准教授 網谷 真理恵

### 功労賞

#### 「がんサポーターシップケアにおける漢方の意義およびエビデンスの普及活動」

福井県済生会病院 内科部長兼集学的がん診療センター 顧問 / 金沢医科大学 名誉教授 元雄 良治

## ■ 2022年度研究助成最終報告 15:50～

座長: 愛媛大学医学部附属総合医学教育センター長・教授 小林 直人

聖マリアンナ医科大学 総合教育センター センター長 伊野 美幸

### <一般研究>

#### 1. 「医学生を対象にした随証治療による漢方処方選択の確立」

弘前大学医学部附属病院 検査部 助教 皆川 智子

#### 2. 「科学的エビデンスを取り入れた鍼灸に関わる医学教育の研究開発」

富山大学附属病院 医療情報・経営戦略部 教授 高岡 裕

#### 3. 「卒後漢方教育への漢方医学 eラーニング〈臨床応用編〉の導入」

湘南病院 東洋医学センター長・内科部長 / 東海大学医学部 専門診療学系 漢方医学 准教授 中田 佳延

#### 4. 「漢方医学に関する診療や教育支援のための 証・方剤選択アプリケーションツール開発」

京都府立医科大学 総合医療地域医療学教室 講師 丹羽 文俊

#### 5. 「教育 DXモデルとしての漢方医学教育に資する多職種連携教育」

新潟大学 大学院医歯学総合研究科 医学教育センター / 新潟大学 医歯学総合病院 脳神経内科 准教授 河内 泉

#### 6. 「漢方医学への学習意欲向上プロセスの探索 ～医学生の漢方教育× Long COVID プロジェクトを通して～」

岡山大学 研究准教授 / 岡山大学病院 総合内科・総合診療科 助教 徳増 一樹

### <グループ研究>

#### 1. 「Virtual University of Kampo medicine (漢方版の放送大学) 構想と実証実験」

国際医療福祉大学成田病院 予防医学センター 病院教授 / 千葉大学 真菌医学センター 特任教授 並木 隆雄

#### 2. 「橈骨脈波の定量的解析データに基づく脈診シミュレータの開発」

公立小松大学 大学院サステイナブルシステム科学研究科 准教授 山田 昭博

■ **教育講演1** 16:30～ 座長:日本漢方医学教育振興財団 評議員 久光 正

「医学教育の現状と課題」

文部科学省 高等教育局 医学教育課 企画官 堀岡 伸彦

■ **教育講演2** 17:05～ 座長:日本漢方医学教育振興財団 理事 小西 郁生

「医師臨床研修制度の最近の動向」

厚生労働省 医政局医事課 医師臨床研修推進室長 野口 宏志

■ **パネルディカッション** 17:30～

座長:日本漢方医学教育振興財団 理事 前野 哲博

日本漢方医学教育振興財団 理事 高山 真

「臨床研修における漢方医学教育の現状と取り組み」

1. 中国地区6大学漢方ネットワークの取り組み～研修医教育の現状について

広島大学医学部附属医学教育センター センター長 蓮沼 直子

2. 卒後研修医教育における漢方処方の意義

NPO法人 MMC卒後臨床研修センター長 /伊賀市立上野総合市民病院 副院長 櫻井 洋至

3. 鳥取県での臨床研修病院漢方医学教育の取り組み

鳥取県臨床研修指定病院協議会 会長 /鳥取県立中央病院 院長 廣岡 保明

■ **閉会のあいさつ** 18:25～

日本漢方医学教育振興財団 評議員 伴 信太郎

(敬称略)

## 2024年度 表彰者一覧

### 奨励賞

#### 「漢方医学教育開発への取り組み」

鹿児島大学大学院 医歯学総合研究科地域医療学分野 准教授 網谷 真理恵

### 功労賞

#### 「がんサポーターケアにおける漢方の意義およびエビデンスの普及活動」

福井県済生会病院 内科部長兼集学的がん診療センター 顧問 / 金沢医科大学 名誉教授 元雄 良治

## 2024年度 漢方医学教育研究助成 採択者一覧

### 一般研究

#### 1. 「Near-peer teaching (NPT) による漢方医学教育の実践と教育効果の検討」

大分大学医学部感染予防医学講座 教授 小林 隆志

#### 2. 「全人的医療としての漢方医学の有用性の体験的気づきを通して、 医学生が医療者と協働して開発する教育ビデオ」

関西医科大学医学部心療内科学講座 教授 蓮尾 英明

#### 3. 「鍼灸分野の実習および Bed Side Learning教材の開発と検証」

福島県立医科大学会津医療センター附属研究所 漢方医学研究室鍼灸部漢方外科 教授 鈴木 雅雄

#### 4. 「医学、歯学、看護学、栄養学で共有できる漢方教育教材開発」

鹿児島大学大学院 医歯学総合研究科地域医療学分野 准教授 網谷 真理恵

#### 5. 「バーチャル患者で学ぶ舌診・望診学習のための教育動画作成 (舌撮影解析システム TIASと生成 AIの活用)」

横浜薬科大学 薬学部 生薬学研究室 講師 村上 綾

### グループ研究

#### 1. 「医師臨床研修指導ガイドラインに対応した漢方医学の初期研修カリキュラム および教材のモデル作成」

福島県立医科大学会津医療センター附属病院 漢方医学講座 講師 畷田 一司

#### 2. 「医学生を対象とした漢方 Webテスト実施の試み」

名古屋大学医学部附属病院総合診療科 病院教授 佐藤 寿一

(敬称略)

## 漢方医学教育開発への取り組み ～カリキュラム、方略、教材、評価法の開発～

鹿児島大学大学院医歯学総合研究科 国際島嶼医療学講座 地域医療学分野 准教授 網谷 真理恵

全国的に医学教育の質の向上が求められる中、漢方医学も医学教育の枠組みに合わせ教育カリキュラムを構築させていくことが求められている。これまでに日本漢方医学教育協議会の活動として、全国82医学部、および歯科、薬学、看護科での漢方医学教育の現状に関するアンケートを実施し報告してきた。漢方医学教育実施に当たり、確保できるカリキュラム時間や指導者数など教育資源の大学間格差がこれまでの調査で明らかとなっている。

このような全国的な漢方指導者不足が課題となる現状において、鹿児島大学も、漢方の指導者も専門医も少ない中でどのように漢方医学教育を実施するかが直面していた課題であった。限られたマンパワーを医学教育のカリキュラムで補うために、カリキュラム開発に精力的に取り組んできたことが原点にある。医学教育の理論を漢方医学教育に応用し、医学生にとってわかりやすく学習意欲が向上する教材やカリキュラムの開発を医科、歯科、薬剤師の連携体制をとり行ってきた。具体的には、Problem-Based Learning (PBL) の導入、腹診シミュレーターや模擬患者を用いたシミュレーショントレーニング、生薬ワークや舌診ワーク、漢方学習教材用カードゲームの作成、Objective Structured Clinical Examination (OSCE) の開発などである。複数の方略を組み合わせることの有用性、OSCE開発のプロセスについて報告している。さらに、日本漢方医学教育振興財団の教材委員として、先生方の助言を基に教材開発や指導者用ガイドビデオ作成も進めている。

また、医学部・歯学部・看護・薬学の領域でモデル・コア・カリキュラムに和漢薬について記載されているが、漢方医学教育は学部間でも差があること、教育や連携体制のニーズについても報告している。今後は医学部間だけの連携ではなく、学科間での教育連携体制をはかることが重要となってくる。

学生の漢方への関心を向上させ、少人数でも質の高い教育が実施できるようなカリキュラムや教材を提供できるように邁進していきたい。

## 略 歴

---

2006年 鹿児島大学医学部卒業  
2008年 鹿児島大学医学部・歯学部附属病院医員（心身医療科）  
2011年 がん研有明病院 漢方サポート科  
2012年 鹿児島大学大学院医歯学総合研究科医歯学教育開発センター 助教  
2014年 鹿児島大学大学院医歯学総合研究科離島へき地医療人育成センター 特任助教  
2017年 鹿児島大学医歯学総合研究科地域医療学分野 講師  
2022年 鹿児島大学大学院医歯学総合研究科地域医療学分野 准教授  
現在に至る

## 資 格

---

医学博士  
日本東洋医学会漢方専門医  
日本心身医学会・心療内科学会合同心療内科専門医・指導医  
日本プライマリ・ケア学会 認定医・指導医  
日本医学教育学会医学教育認定専門家  
日本内科学会 認定内科医  
臨床心理士 / 公認心理士

## 所属学会等

---

日本内科学会  
日本東洋医学会 代議員  
日本医学教育学会 代議員  
日本心身医学会 代議員  
日本心療内科学会  
日本統合医療学会（鹿児島支部事務局）  
日本プライマリ・ケア連合学会（鹿児島支部事務局）  
日本漢方医学教育協議会（事務局）



## がんサポーターティブケアにおける漢方の意義および エビデンスの普及活動

福井県済生会病院 内科部長・集学的がん診療センター 顧問/金沢医科大学 名誉教授 元雄 良治

がん薬物療法には術前・術後・進行再発の3つの場面があるが、いずれも予定通りの治療計画を完遂できれば、有効性と安全性の確実なエビデンスがある。そのためには「標準治療を完遂するための漢方」という理念で対応することが重要である。とくに担がん生体である患者は、気力の衰え・冷え・サルコペニア・フレイル・生体防御能の低下などを経験するので、漢方治療の良い適応である。

抗腫瘍薬の副作用には、対応可能な好中球減少や悪心・嘔吐と、対応困難な全身倦怠感・食欲不振・末梢神経障害などがある。日本がんサポーターティブケア学会漢方部会が作成した「がんサポーターティブケアのための漢方活用ガイド」ではこのような難治性副作用を優先して記載し、各症状に対する医療用漢方製剤の基本処方と鑑別処方がフローチャート形式で提案されている。

また、日本東洋医学会 EBM委員会では2007年から医療用漢方製剤を用いたランダム化比較試験(RCT)の構造化抄録である漢方治療エビデンスレポート(EKAT)をウェブ公開している。2024年8月30日までに560件のRCTを扱っており、その中でもがん関連のRCTが105件と最多である。

福井県済生会病院では「漢方を活用したがん治療サポート外来」を2019年6月に開設し、病院内外から紹介を頂いている。またこの外来で、漢方専門医を目指して2名の医師が研修中である。これまでの経験例を2025年6月のフランス・リールでの国際がんサポーターティブケア学会で発表した。

がんサポーターティブケアにおける漢方の意義を考えると、副作用対策にとどまらず、栄養改善、就労・生きがい支援まで視野に入れたい。多職種連携のチーム医療の中で漢方を共通言語となるように努め、次世代の医師・医療者が漢方に親しめるようにしたい。今後ともがん患者の旅路に寄り添う臨床医として、高品質の医療用漢方製剤をさらに活用していきたい。

## 略 歴

---

- 1980年 東京医科歯科大学（現 東京科学大学）医学部医学科卒業、同年金沢大学第1内科入局  
1984年 米国テキサス州ダラス・ワドレー分子医学研究所研究員（2年間）  
1988年 金沢大学がん研究所腫瘍内科助教、1992年 同講師、2003年 同准教授  
2002年 フランス・マルセイユ国立医学研究所に文科省短期在外研究員として滞在  
2005年 金沢医科大学腫瘍内科学主任教授、集学的がん治療センター長  
2021年 金沢医科大学名誉教授、医療法人社団愛康会小松ソフィア病院腫瘍内科部長  
2023年 福井県済生会病院内科部長・集学的がん診療センター顧問

## 学会活動

---

米国内科学会最高荣誉会員（マスター：MACP）、国際東洋医学会副会長（元会長）、国際漢方医学会副会長、日本がんサポーターケア学会漢方部会長、日本東洋医学会理事（EBM委員会担当）、和漢医薬学会評議員（元理事、第38回学術大会長）、日本医学英語教育学会評議員（元理事、第24回学術集会長）、日本病態栄養学会学術評議員、腫瘍内科医会顧問（元代表）、総合内科専門医、がん薬物療法専門医、漢方専門医、消化器病専門医、肝臓専門医

## 著 書

---

- 「全人的がん医療：がんプロフェッショナルを目指して」じほう（東京）2007年  
「腫瘍学：知っておきたいがんの知識とケア」じほう 2015年  
「まるごとわかる！がん」南山堂（東京）2017年（改訂第2版 2021年、改訂第3版 2024年）  
「エビデンスを活かす 漢方でできるがんサポーターケア」南山堂 2019年  
「がんサポーターケアのための漢方活用ガイド」南山堂 2020年（共著、編集責任者）

## 受賞歴

---

- 2006年 日本東洋医学会 学術奨励賞  
「柴胡桂枝湯の膻炎治療効果の機序に関する研究」  
2008年 武見記念生存科学研究基金 武見奨励賞  
「我が国における臓器横断的分野としての腫瘍内科学の確立と集学的がん治療への  
伝統医学の応用」  
2021年 日本東洋医学会 学術賞  
「抗がん剤による末梢神経障害に対する漢方治療：人参養栄湯の可能性」  
2022年 和漢医薬学会 学会賞  
「がんサポーターケアへの和漢薬の応用：そのサイエンスとアート」  
2024年 Traditional & Kampo Medicine誌「Top Cited Award 2023」  
2024年 日本漢方医学教育振興財団功労賞  
「がんサポーターケアにおける漢方の意義およびエビデンスの普及活動」

## 1. 医学教育の現状と課題

文部科学省 高等教育局 医学教育課 企画官 堀岡 伸彦

略歴

2005年4月	東京都保健医療公社 多摩南部地域病院で初期研修医として勤務
2007年5月	厚生労働省入省 保険局医療課で診療報酬改定を担当
2011年9月	原子力災害対策本部被災者支援チーム医療班で原子力災害被災者の被曝線量の推定などの業務に従事
2012年12月	厚生労働省 健康局疾病対策課課長補佐で難病改革に従事
2013年4月	厚生労働省から山梨県福祉保健部 健康増進課長として出向
2015年4月	山梨県福祉保健部 参事・医務課長
2016年4月	厚生労働省 医政局医事課課長補佐
2017年8月	厚生労働省 医政局医事課医師養成等企画調整室長
2019年8月	厚生労働省 医政局総務課保健医療技術調整官
2020年1月～	厚生労働省 新型コロナ対策本部医療班併任（武漢便帰国、ダイヤモンドプリンセス号対応）
2020年8月	厚生労働省 医政局経済課 医療機器政策室長
2022年7月	文部科学省 高等教育局医学教育課企画官

医学教育に関しては他の高等教育のカリキュラムと異なり、文部科学省において医学教育モデル・コア・カリキュラムを定め、平成13年から6年に一度改定してきており、令和4年度には5回目の改定を行っている。

このモデル・コア・カリキュラムは日本医学教育評価機構の評価にも採用されており、全国の医学部でモデル・コア・カリキュラムに基づく教育が行われている。

漢方に関する教育は、平成13年に制定された当時から記載されており、現在では多くの大学が漢方教育の充実に取り組んでいる。

一方、医学教育・研究に現在大きな影響を与えているのは医師の働き方改革である。

医学教育・研究の中核を担う大学病院医師は元々長時間労働であったが、さらに平成16年の国立大学法人化以降診療に関わる時間が大幅に増加したことから、医学、保健に携わる教員のみ教育・研究に費やす時間がどんどん減少してきていたところである。

加えて、本年度からは医師の労働時間に上限規制が定められ働き方改革が推進されており、日本の医学教育・研究に大きな影響を与えることが懸念されている。

そのため、文部科学省でも10年ぶりに抜本的な医学教育・研究に関する政策を検討するために「今後の医学教育の在り方に関する検討会」を開催し、新たな政策を展開しているところである。

ここでは、モデル・コア・カリキュラムにおける漢方の位置づけにとどまらず、日本の医学教育・研究の在り方に関する現在の議論の進捗について紹介する。

## 2. 医師臨床研修制度の最近の動向

厚生労働省 医政局医事課 医師臨床研修推進室長 野口 宏志

略歴

2006年 4月 文部科学省入省 研究振興局研究環境・産業連携課  
2007年 2月 文化庁文化部芸術文化課  
2009年 4月 初等中等教育局初等中等教育企画課  
2010年 7月 初等中等教育局国際教育課外国語教育推進室  
2011年 7月 農林水産省消費安全局表示・規格課  
2013年 7月 大臣官房政策課  
2014年11月 生涯学習政策局参事官付  
2017年 4月 三重県教育委員会小中学校教育課  
2019年 4月 生涯学習政策局生涯学習推進課  
2020年11月 初等中等教育局教育課程課  
2022年 4月 総合教育政策局教育 DX推進室  
2024年 4月 厚生労働省医政局医事課医師臨床研修推進室

令和7年度以降に開始される新たな臨床研修制度に向けた制度の見直しについては、令和5年度に医道審議会医師分科会医師臨床研修部会で議論し、令和6年3月に報告書が取りまとめられた。

報告書の主な内容は以下の5点。まず、令和2年度見直しにおいて新たに作成した臨床研修の到達目標・方略及び評価については、現時点においてその内容等について評価を行うのは困難であると考えられるため、今回の見直しでは、特段改訂を行わない旨の提言があった。

2点目として、臨床研修病院の指定基準について、年間の入院患者数が2,700人未満の病院についても、条件を満たす場合に限り基幹型病院として指定することができる旨の提言があった。

3点目として、小児科・産科特別プログラムについて、小児科または産婦人科における研修の週数を12週以上とすることや、小児科・産科特別プログラムの実施を原則としつつ、必修診療科のうち、都道府県において医師が不足している診療科の研修を重点的に行う研修プログラムへの変更を可能とする旨の提言があった。

4点目として、臨床研修病院の第三者評価の受審を促進するための方策例として、第三者評価の受審及び受審結果の公表の努力義務化などの提言があった。

5点目として、地域における研修機会の充実について、医師多数県のうち募集定員上限に占める採用率が全国平均以上の都道府県は、当該都道府県の募集定員上限の5%以上を、医師少数県のうち採用率が全国平均以下の都道府県に所在する臨床研修病院等において、24週程度の研修を行う研修プログラムの募集定員に充てる旨の提言があった。

これら報告書に盛り込まれた内容について、令和7年度からの研修での実施に向け、現在、厚生労働省にて準備、調整を行っているところ。

## 〈一般研究1〉医学生を対象にした随証治療による 漢方処方選択の確立

弘前大学医学部附属病院 検査部 助教 皆川 智子

### 略歴

1996年3月 東北大学 農学部応用生物化学科 中退  
2002年3月 弘前大学 医学部医学科 卒業  
2002年4月 弘前大学 大学院医学研究科皮膚科学講座入局  
2003年4月 青森県立中央病院 青森県技術吏員に採用  
2004年4月 弘前大学 医学部附属病院 医員に採用  
2007年10月 日本皮膚科学会 皮膚科専門医 取得  
2008年3月 弘前大学 大学院医学研究科医科学 博士課程 卒業  
2008年4月 弘前大学 医学部附属病院 助教(皮膚科)に採用  
2008年11月末同上 辞職(第1子懐妊に伴い退職)  
2010年2-7月 Department of Dermatology-Division of  
Dermatopathology, University of  
Pennsylvaniaにて研修  
2010年9月 弘前大学 医学部附属病院 医員(皮膚科)に採用  
2016年4月 弘前大学 医学部附属病院 助教(検査部)に採用  
2017年2月 日本医師会認定産業医 取得  
2018年1月 ICD 制度協議会認定 ICD取得  
2019年4月 日本東洋医学会 漢方専門医 取得  
2019年8月 日本臨床検査医学会 検査管理医 取得  
2021年10月 日本臨床検査医学会 検査専門医 取得  
2021年12月 日本東洋医学会 漢方指導医 取得  
2022年2月 弘前大学 医学部附属病院 診療講師  
2023年7月 特定化学物質・四アルキル鉛等作業主任者 取得  
2023年8月 有機溶剤作業主任者 取得  
2023年8月 青森県精度管理専門委員  
2024年4月 産業医(弘前大学本町地区)  
2024年6月 化学物質取扱者 取得

### 所属学会

日本東洋医学会、日本臨床検査医学会、日本臨床検査専門医会  
日本人類遺伝学会、日本医療検査科学会、日本皮膚科学会  
日本臨床皮膚科医会、皮膚かたち研究会、日本乾癬学会  
日本女医会、日本感染症学会  
American Academy of Dermatology

### 1. '証'や'随証治療'を学ぶ

漢方医学で考えられる病態生理: '証'や'随証治療'を理解し、実践できるようにするため、弘前大学医学部医学研究科4年生の臨床薬理・和漢薬学講義において、漢方医学の基礎理論(陰陽説、五行説、三陰三陽)、漢方医学的診察法(四診:望診、聴診、問診、切診)、『気血水』の所見、寒熱虚実の'証'の判断について講義した。腹診の漢方e-learning後に腹診シミュレータ(腹部診断用模型)で実技指導も行った。

### 2. 和漢薬学講義授業数維持と発展

1年生の基礎人体科学演習に漢方の講義が組み込まれ、早期から漢方教育が可能となった。適した漢方を選択できるようになることを目指し、外来やベッドサイドで遭遇した漢方薬の適応や使い方を即座に理解できるよう、診療科毎に処方される頻度の高い漢方薬をcompactにまとめた「弘前大学 漢方手帳」を臨床実習開始前にPDFで配布し、5年時の検査部実習の際にアンケートでremindし、回答者に白衣のポケットに入るサイズの「弘前大学 漢方手帳」を配布した。医学生が持ち歩いてくれ、医師や薬剤師からもご要望あり、漢方教育に関するご理解を得ることに役立った。

### 3. '随証治療'の実践

『基本がわかる 漢方医学』(日本漢方医学教育協議会 編、羊土社)を講義時に使用、講義がない期間は学務から貸し出し、自学自習への意識を高めた。本院以外の医療従事者も参加できる勉強会を年4回開催し、漢方研究会の学生と弘前大学東洋医学研究会の医師に対面で講義や腹診シミュレータで実技指導を行った。WEBでも視聴できるようにし、卒後も漢方を学ぶ機会を確保した。

### 4. 漢方教育の地域、多職種連携

本学の21世紀教育科目、保健学科、弘前市薬剤師会で講義できた。多職種で基礎医学→臨床医学→臨床実習→卒後も漢方を学ぶ機会を設け、漢方教育を推進する。

## 〈一般研究2〉科学的エビデンスを取り入れた 鍼灸に関わる医学教育の研究開発

富山大学学術研究部医学系(計算創薬・数理医学講座)教授/富山大学附属病院 医療情報・経営戦略部 教授 高岡 裕

### 略歴

1989年 明治鍼灸大学卒業  
1991年 徳島大学大学院栄養学研究科博士前期課程修了(栄養学修士)  
1997年 東京大学大学院医学系研究科分子細胞生物学専攻単位取得退学(1997)  
東京大学医科学研究所/理化学研究所ゲノムセンターポスドク(～1999年)  
理化学研究所播磨研究所研究員(～2001年)  
岩手医科大学口腔生化学講座助手(～2004年)  
神戸大学大学院医学研究科特命講師(～2007年)  
同 特務准教授(～2009年)  
同 小児科学分野特命准教授(～2011年)  
神戸大学医学部附属病院准教授(～2021年)を経て、  
2021年5月から富山大学学術研究部医学系 教授/附属病院 医療情報・経営戦略部 部長、  
神戸大学大学院医学研究科医療システム学 客員教授、  
熊本大学生命資源研究・支援センター 疾患モデル分野 客員教授、  
神戸常盤大学保健科学部臨床検査学科 特命教授

[背景] 医学生・薬学生は分子細胞生物学を学んでおり、漢方薬についての教育でも臨床薬理的な内容が含まれており、垂直統合的である。そこで鍼灸についても、学知を垂直的に統合した鍼灸教材を創出すべく取り組んだ。

[方法] 鍼灸に関する分子細胞生物学、神経科学の面から明らかになっている内容や系統的な臨床研究評価(コクラン・システマティックレビュー)を内容として、動的スライドにすることで直感的に理解可能な教材を作成した。そして富山大学倫理委員会の許諾(整理番号 R2023026)の上で学生から同意を得て、①福島県立医科大学2年生、②福島県立医科大学3年生、③富山大学医学部3年生、④富山大学薬学部2年生、⑤兵庫医科大学3年生(2年目のみ)、⑥神戸大学医学部6年生、⑦熊本大学医学部3年生、⑧熊本大学薬学部2年生、を対象に講義を行った。講義内容の評価は、アンケート調査(①理解できたかどうか?②理解しにくかった部分とその理由、③自由意見)により実施した。

[結果] 2年間で、合計1,250人の学生からのアンケート結果に加え、明治国際医療大学大学院(鍼灸)修士課程の鍼灸師学生7名からも意見を得た。特徴的な意見として、医学科2年生の「神経科学と細胞生物学での学習直後であり、鍼の効果の分子メカニズムがとてもよく理解できた」という意見が多数だった。しかし、逆に医学科6年生からは「ベットサイドに出ており基礎医学を忘れており、思い出すのが大変だったのと、鍼灸臨床の内容が多ければ興味深かった」、という回答を得た。そこで2年目に、鍼灸臨床に重点を置いた教材を作成し、福島医大で用いた。教材全般への意見では、アニメーションスライドが分かりやすいという評価が多数であった。

[考察] 今回の講義を実施した学年により、教育内容を変えることが学習効果を上げると示唆された。

## 〈一般研究3〉卒業漢方教育への 漢方医学eラーニング〈臨床応用編〉の導入

社会福祉法人湘南福祉協会総合病院 湘南病院 内科部長・東洋医学センター長/  
東海大学医学部 専門診療学系 漢方医学 准教授 中田 佳延

### 略歴

2001年3月 東京慈恵会医科大学医学部医学科卒  
2001年4月 東京慈恵会医科大学附属病院研修医  
2003年4月 東京慈恵会医科大学大学院（臨床系）  
（2003年4月～2006年3月 循環器内科レジデント）  
2007年4月 東京慈恵会医科大学循環器内科学助教  
（2007年6月～2009年9月 Medizinische Universitaet Innsbruck）  
2012年4月 総合病院 湘南病院 内科医長  
2015年4月 東海大学医学部専門診療学系漢方医学 助教  
2016年4月 東海大学医学部専門診療学系漢方医学 講師  
2019年4月 東海大学医学部専門診療学系漢方医学 准教授  
2020年4月 総合病院 湘南病院 出向 内科部長  
[2014年4月～2015年3月 あきば伝統医学クリニックにて秋葉哲生先生に師事]

日本内科学会 認定医・総合内科専門医  
日本循環器学会 循環器専門医  
日本東洋医学会 専門医・指導医

### はじめに（漢方医学 eラーニングコース：基礎編）

漢方医学 eラーニングコース（いわゆる基礎編）は、新井信らにより2019年度に日本漢方医学教育振興財団「漢方医学教育研究助成」グループ研究助成を得て、神奈川県4大学医学部FDフォーラム（神奈川県4FD）が中心となって作成が開始された。これは、プロのナレーターによる収録や英語版の作成を経て、実際の講義に導入されて評価を受けている。さらに、国内外の学会はもとより、2024年12月中旬現在は論文化を経て査読結果を待っているところである。

### 臨床応用編

基礎編は、臨床で比較的処方される漢方処方を中心とした講義内容であったが、臨床応用編は各12分野の症状を中心に主な漢方薬とその鑑別処方を述べるスタイルとなっている。e-learningの流れは基礎編とほぼ同様とし、今回も神奈川県4FDが中心となって作成した。上部・下部消化器疾患は新井信が、急性・慢性呼吸器疾患は星野卓之が、循環器疾患・精神疾患は中田佳延が、婦人科疾患・頭頸部疾患は五野由佳里が、高齢者疾患・疼痛性疾患は野上達也が、そして腎泌尿器疾患・全身疾患は石上友章がそれぞれ担当した（敬称略）。特徴は、各症状を中心とし、随伴症状や病名などで分類し処方を提示するスタイルとした。さらに、イラストを交えて処方を説明し、典型かつ簡単な症例提示とともに印象づけることを目標とした。最終的には、チャレンジテストを行い、全問正解した際に終了証を発行する。基礎編を終了した者や、漢方を少し勉強した者にターゲットを置いている。

### 今後の展望

今後は、基礎編英語版の海外での施行と評価、臨床応用編の英語版の作成と、臨床応用編の教育ツールとしての評価を課題としている。

### さいごに

e-learning作成に参与していただいた先生方、日本漢方医学教育振興財団の皆様方、支えてくださった多くの方々に心からの感謝を述べたい。

## 〈一般研究4〉漢方医学に関する診療や教育支援のための 証・方剤選択アプリケーションツール開発

京都府立医科大学 総合医療・地域医療学 講師 丹羽 文俊

### 略歴

2001年 京都府立医科大学医学部 卒業  
2012年 同大学大学院医学研究科 脳神経内科学 博士課程修了  
2014年 放射線医学総合研究所 分子イメージング研究センター 客員研究員・博士研究員  
2019年 京都府立医科大学 総合医療・医学教育学（神経内科学 併任）講師  
2023年 同大学 総合医療・地域医療学（神経内科学 医学教育センター 併任）講師

漢方診療や教育支援において、最適な方剤選択を提案するアプリケーション（アプリ）は臨床現場や初学者にとって大きな助けとなる。近年、ChatGPTに代表される人工知能プラットフォームの登場により、アルゴリズムを用いたツールの開発が容易になりつつあるが、我々は実臨床データを基に漢方医学特有の理論を数理モデルに応用し、新たなアプローチを目指した。

今回、文献症例および大学病院の患者記録を用い、症候・証・方剤のパターンを整理し数理解析を行った。この解析には、適切な方剤によって病態を正常な状態に近づけるとする「方格」の理論を応用した数理モデルを採用した。また、症状パターンをクラスタリング解析することで新たな「証」の形を探索的に検討し、2024年の日本東洋医学学会学術大会で発表し一定の評価を得た。一方で、当初の目標である方剤選択支援アプリについては、WEBブラウザ上で動作するプロトタイプアプリを作成するに至った。症候と方剤の複雑な関係性を視覚的に示すことができる点もこのアプリの特徴である。このアプリを実際に臨床医に試用してもらい、教育支援ツールとしての有用性をアンケート形式で評価し、得られたフィードバックを基に改良を進めている。

従来にも類似のアプリは存在したが、本研究の独自性は、リアルワールドのビッグデータを用いて、漢方の症候・証・方剤の複雑な関係性を数理モデルで解析した点にある。このアプローチは、従来の経験則に基づく方剤選択を補完し、客観性と再現性を備えた新たな方法論を提示した。また、新たな「証」の形を提案するなど副次的な成果も得られた。今後は、プロトタイプにさらなるモデル改良やチューニングを加え、臨床における実用性と教育現場での活用を両立したアプリの完成を目指す。最終的には、漢方診療や教育支援の現場で広く活用されるツールとして改良を重ねていく計画である。



## 〈一般研究5〉教育DXモデルとしての 漢方医学教育に資する多職種連携教育

新潟大学 大学院医歯学総合研究科 医学教育センター/新潟大学 脳研究所・医歯学総合病院 脳神経内科 准教授 河内 泉

### 略歴

1993年 新潟大学医学部卒業  
1993-1995年 新潟大学内科研修医  
1995年 新潟大学脳研究所神経内科入局  
1995-1998年 新潟大学医歯学総合病院、新潟市民病院、富山県立中央病院、燕労災病院、佐渡総合病院で神経内科診療を行う。  
2002年 新潟大学大学院医学研究科博士課程修了  
2003年 米国ワシントン大学医学部免疫学分野 Marco Colonna教授研究室に留学し、基礎免疫学、特に自然免疫のメカニズムを研究する。  
2006年 新潟大学脳研究所神経内科 医員  
2007年 新潟大学医歯学総合病院 助教  
2010年 同 病院講師  
2015年 同 講師  
2019年 新潟大学 大学院医歯学総合研究科 医学教育センター・脳神経内科学 准教授

医学博士、日本神経学会神経内科専門医・指導医、日本認知症学会認知症専門医・指導医、総合内科専門医、認定内科医、認定医学教育専門家

### 所属学会等

アメリカ神経学会、アメリカ免疫学会、国際神経免疫学会 (18th International Congress of Neuroimmunology 2025 (ISNI 2025) ; Publication Committee (Chair)、Award Selection Committee)、日本神経学会 (専門医、指導医、将来構想委員会委員、専門医認定委員会委員、教育委員会委員、多発性硬化症・視神経脊髄炎診療ガイドライン作成委員、母性神経学セクションコメンバ)、日本神経免疫学会 (理事、評議員、将来計画検討ワーキンググループ委員、MS治療支援グループ委員会委員、レジストリー検討委員会委員)、日本免疫学会、日本神経治療学会 (評議員)、日本内科学会 (認定医、専門医)、日本神経病理学会 (評議員、指導医、用語委員会委員)、日本神経感染症学会、日本頭痛学会、日本認知症学会 (専門医、指導医)、日本リハビリテーション医学会、日本脳卒中学会、日本神経化学会、日本母性内科学会 (幹事)、日本医学教育学会 (医学教育専門家)、日本医学英語教育学会、日本シミュレーター医療教育学会 (評議員)、医療系大学間共用試験実施評価機構医学系 OSCE課題作成小委員会 (委員)、新潟県新潟水俣病施策推進審議会 (委員)

世界医学教育連盟のグローバルスタンダードに準拠した医学教育評価基準で「医学教育プログラムは、補完医療との接点を持つこと (領域2)」、医学教育モデル・コア・カリキュラム (令和4年度改訂版) で「漢方医学の特徴、主な和漢薬 (漢方薬) の適応、薬理作用について概要を理解していること (CS-02-04-14)」が求められており、漢方医学は、世界と日本の両面において医学生が身につけるべき重要な学問と考えられている。特に、医師、看護師、薬剤師、鍼灸師等による多職種連携協働 (IPW)・チーム医療の推進が漢方医学の遂行に重要である。近年、WHOは多職種連携教育 (IPE) とその実践 IPWを推進することは、医療分野の人材育成に関する革新的戦略と位置づけていることから、本研究では、①漢方医学、② IPE/IPW、③オンライン教育を統合・推進することにより、「教育 DXモデルとして、新たに漢方医学教育に資するオンライン IPEを実践し、その教育効果を検証すること」を目的とした。本研究の成果として、①「オンライン IPEの教育効果のエビデンス」の集積し、②オンライン IPEとその基本方略・TBLを運営するためのコンテンツ作成した。オンラインで運用可能な「漢方医学に資する IPE」の開発・構築は、組織・国を越えた教育シーズへ発展させることができることから、全国の医療系大学 (薬学部、リハビリテーション系学部、社会福祉学部等) とのオンライン合同 IPE演習や、海外大学とのグローバルな連携を目指したオンライン化合同 IPE演習への発展が可能である。これらを通じて、アジア諸国・欧米を含めた世界や、教育資源の乏しい過疎地においても、漢方医学教育を推進することができる。医療系学科である医学科、保健学科、歯学科を中心に、「学科の枠を越えた漢方医学教育」へ波及効果を持つと想定される。

## 〈一般研究6〉漢方医学への学習意欲向上プロセスの探索 ～医学生の漢方教育×Long COVIDプロジェクトを通して～

岡山大学 研究准教授/岡山大学病院 総合内科・総合診療科 助教 徳増 一樹

### 略歴

2013年岡山大学医学部卒業。沖縄県立中部病院での初期臨床研修・内科後期研修、沖縄県立北部病院総合内科スタッフを経て、2018年より岡山大学病院総合内科・総合診療科助教として着任。一般外来の他に、不明熱外来やコロナ・アフターケア外来を担当し、総合内科・総合診療科としての強みを活かし診療・研究・教育にあたっている。2023年よりAMED（国立研究開発法人日本医療研究開発機構）より研究助成を受け、漢方医療を活かしたコロナ後遺症の研究を進めている。2024年7月には、それまでの研究実績が認められ、研究准教授となった。

2024年7月～	岡山大学 研究准教授
2018年6月～	岡山大学病院 総合内科・総合診療科 助教
2018年4月～2018年5月	岡山大学病院 総合内科・総合診療科 医員
2017年4月～2018年3月	沖縄県立北部病院 総合内科 医員
2015年4月～2017年3月	沖縄県立中部病院 内科後期研修医
2013年4月～2015年3月	沖縄県立中部病院 初期臨床研修医
2009年4月～2013年3月	岡山大学医学部医学科
2005年4月～2009年3月	東邦大学薬学部薬学科
2004年3月	愛媛県立西条高等学校 卒業

【背景】医学生は、過去の調査やヒアリングの結果、実際の臨床現場で漢方医学を学びたい意欲・関心が潜在的にあることがわかった。しかし、その実践を学べる環境は限定的であり、漢方医学教育上の課題である。医学生の臨床実習において、COVID-19罹患後の患者診療を題材として、事前学習・振り返りを組み合わせ、「漢方教育×Long COVIDプロジェクト」による漢方医学への学習意欲の変化を量的・質的に調査した。

【方法】岡山大学病院 総合内科・総合診療科をローテーションする臨床実習生（岡山大学医学科4年生から6年生）に対し、本プロジェクトの希望者の中から研究参加同意が得られた者を組み入れた。量的解析（学習意欲向上指標）・質的解析（インタビューによる言語化とテーマ分析による解析）を行った。岡山大学医療系部局臨床研究審査専門委員会の承認を得て実施した（研2303-023）。

【結果】2023年4月から2024年10月に、医学科6年生（5名）、5年生（24名）、4年生（7人）の合計36人を組み入れた。女性が16人、男性が20人だった。ARCS動機づけモデルに基づくCourse Interest Survey日本語版尺度は実習前が45.7（SD8.3）点から実習後57.5（SD6.1）まで上昇した（ $p < 0.01$ , 95%信頼区間 -14.4, -9.1）。質的解析では、実際に症例を元にした題材で漢方医学を学んでいく中で、背景理論の多様さなどの課題があった。ただし、処方する方剤の根拠を学習したい、実際の症例をもとに学習したいといった意欲向上プロセスが存在した。

【考察と結論】医学生にとって、漢方医学の学習機会の少なさや背景理論への親和性の少なさや学習のハードルだが、最初の一步としてe-learningを用いつつ、症例を元にした学習は、将来の臨床現場を想起しやすく、臨床教育としての学習に結びついた可能性がある。

## <グループ研究1>Virtual University of Kampo medicine (漢方版の放送大学) 構想と実証実験

国際医療福祉大学成田病院 予防医学センター 病院教授/千葉大学 真菌医学センター 特任教授 並木 隆雄

### 職歴

1985年 千葉大学医学部卒業  
1985年 千葉大学医学部附属病院第三内科  
1993年 医学博士取得  
1996年 米国 Emory大学留学  
1998年 帝京大学附属市原病院心臓血管センター助手  
1999年 帝京大学附属市原病院心臓血管センター講師  
2002年 千葉県立東金病院内科部長  
2005年 千葉大学大学院医学研究院先端和漢診療学客員助教授  
2010年 千葉大学大学院医学研究院和漢診療学准教授  
2011年 千葉大学医学部附属病院和漢診療科 科長  
2012年 千葉大学医学部附属病院和漢診療科診療教授  
2023年 千葉大学真菌医学研究センター 特任教授  
2023年 国際医療福祉大学成田病院予防医学センター 病院教授

日本東洋医学会認定漢方専門医・指導医・理事、日本循環器学会専門医  
日本内科学会総合内科専門医、不整脈学会専門医

### 共同演者

横浜薬科大学	伊藤 亜希
東海大学医学部	新井 信・野上 達也
東京医科大学	及川 哲郎
千葉大学大学院医学研究院	平崎 能郎
日本歯科大学	矢久保 修嗣

### 背景

2019年に始まった新型コロナウイルス感染症の影響で、オンライン講義が急速に普及した。「漢方医学の教育」では専門家が少ない大学の授業をサポートするために学会の講師斡旋の試みなどが考えられたが実現しなかった。さらに、大学教員の育成 Faculty developmentの必要性を叫ばれてはいるが、具体的な解決策を見いだせずにいる。

### 提案内容

#### 1. 構想:Virtual University of Kampo medicineの構築 (<https://vu-kampo.jp>)

コンテンツの種類としては、基礎研究、臨床研究、古典教育、教育関連内容、Faculty養成関連などとした。また、グレード別のコンテンツの分類をした。また、全国の漢方関連の医学部・薬学部・鍼灸部門および漢方製薬会社の一覧とリンクを作成。そのほか、地域別、内容別にも検索できるような工夫をした。

#### 2. 検証 漢方教育でのオンライン学習の質担保の確認

今回は5大学(千葉大学、東京医科大学、東海大学、日本大、横浜薬科大学)で実施した。そのうち4大学では、2023-24年の授業で、動画による授業と教員による授業で比較を行った。2023年度の授業では「漢方医学の基礎理論」について動画による授業を実施し、「感冒・婦人科疾患」については教員が授業を行った。2024年度の授業ではどちらも教員が授業を行った。各授業後に小テストを実施し、理解度を検証した。A大学の結果を示す(2023年度:n=99、2024年度:n=77)。各小テストの点数は、「漢方医学の基礎理論」(10点満点)は2023、2024年度でそれぞれ平均5.2、5.4点、「感冒・婦人科疾患」(4点満点)で平均1.5、2.1点となりそれぞれの年度で有意差は認めなかった。「漢方医学の基礎理論」でも動画と教員による授業比較で同様の効果が得られ、オンラインの学習の質担保が確認された。

## 〈グループ研究2〉橈骨脈波の定量的解析データに基づく 脈診シミュレータの開発

公立小松大学大学院 サステイナブルシステム科学研究科 准教授 山田 昭博

山田昭博<sup>1</sup> (研究代表者)、井上雄介<sup>2</sup>、関隆志<sup>3</sup>、白石泰之<sup>4</sup>、山家智之<sup>5</sup>

1. 公立小松大学大学院 サステイナブルシステム科学研究科 准教授

2. 旭川医科大学 先進医工学研究センター 准教授

3. 高嶺の森の診療所 院長

4. 東北大学加齢医学研究所 准教授

5. 東北大学加齢医学研究所 教授

研究代表者 略歴

2015年 東北大学大学院医工学研究科医工学専攻修了、博士(医工学)を取得

2014年 日本学術振興会 特別研究員 DC2 採用

2015年 日本学術振興会 特別研究員 PD 資格変更

2015年 国立大学法人東北大学 加齢医学研究所 博士研究員

2016年 国立大学法人東北大学 加齢医学研究所 助教

2023年4月より公立大学法人 公立小松大学大学院サステイナブルシステム科学研究科  
同 保健医療学部臨床工学科 准教授となり、現在に至る。

研究領域は人工臓器医工学、補助循環デバイス、心臓血管外科学、先天性心疾患、生体計測工学、循環器医工学など。受賞歴は第44回人工心臓と補助循環懇話会学術集会ポスター賞「基礎2」第1位、JSST 2013 The 32th JSST Annual Conference International Conference on Simulation Technology, Student Presentation Award, World Congress of Biomedical Engineering, Young Investigator Award (2nd Prize) など。

漢方医学の診察方法の中でも脈診は、最も基本的で重要な診察方法の一つである。しかしながら、現状では医療者の経験や勘に依存し、医学的根拠に基づく客観的な医療・教育体系が十分に確立しているとは言えないのが現状である。脈診では橈骨動脈を触診し、その形態・脈波・物理特性などから診察するが、医学教育過程で多種多様な形態を十分に学習することは難しい。脈診は多様なバリエーションがあるが、これを再現するシミュレータには、定量的な診察データが必要となる。我々は、脈診の方法論に注目し、物理的なセンサにより客観的に定量的に診断する「脈診器」の開発を進めてきた。本研究では、これまで蓄積した脈診器の定量的な解析データをもとに、多様な病態の脈波と物理解剖学的特性を再現できる脈診教育用シミュレータの開発を行った。本研究で開発した脈診シミュレータは、動脈採血シミュレータ(京都科学)の基本構造を採用し、脈診教育用の新規構成要素を組み込むことで迅速な具現化を行った。本デバイスでは、脈診の病証再現のため、内部橈骨骨格3Dモデル、病態血管モデル、皮膚組織モデル、心臓ポンプ機構を新規に設計した。各構成要素の組み合わせにより、浮沈、太細、有力/無力、数遅など、脈診の代表的な脈波を再現することができた。さらに我々の「脈診器」センシング技術を応用し、皮膚モデル表面に感圧センサを組み込むことで、実際の触診圧を学習者にリアルタイムにフィードバックできるシステムを実現できた。様々な病証脈の再現と脈波形提示による教育効果の高い脈診シミュレータのプロトタイプ完成を実現した。一方で、本シミュレータは、あくまで脈波や触診圧を再現したものであり、脈診と病邪を関連して提示するには至っていない。今後は臨床データを収集し、患者データの病気と脈波の関係性を含めた情報提示システムとして発展できれば、臨床上も極めて有益なデバイスになりうる。

## 1. 中国地区6大学漢方ネットワークの取り組み ～研修医教育の現状について～

広島大学医学部附属医学教育センター センター長 蓮沼 直子

### 略歴

1994年3月 秋田大学医学部医学科卒業  
1994年5月 秋田大学医学部皮膚科  
1997年1月～1999年9月 National Institutes of Health, NCI,  
2003年10月 東北大学医学部皮膚科 大学院研究生  
2004年8月 秋田大学医学部感覚器学講座皮膚科学・形成外科学分野  
2009年4月 秋田大学医学部総合地域医療推進学講座  
2019年3月 広島大学大学院医系科学研究科 医学教育学  
広島大学医学部附属医学教育センター 教授  
2019年4月 医学部長補佐・教務委員長  
2019年10月 医学教育センター長

中国地区6大学漢方ネットワークでは中国地区の6大学が2017年より年1回集まり、漢方診療および漢方教育についてテーマを決めて情報共有、ディスカッションを行っている。テーマは臨床から医学教育まで幅広く扱っている。

2024年は広島大学が当番校であったが、テーマを研修医教育とした。

中国地区の世話人を通して、研修医のアンケート調査を行った。中国地区5県の研修医30名から回答があった。卒前教育では、講義、臨床実習について聞いたところ、多くの大学では講義は行っていた。一方で臨床実習については必修の実習は「なし」が多く、選択の実習は「あり」が17%であったが実際に選択した研修医は0人で、なしは63%、覚えていないが20%であった。

研修医になってから漢方を処方したことがあるかという問いに対しては半数が「ある」と回答し、そのうち1～5回が12人で80%を占めたが、11回以上と回答した研修医も3名いた。また処方したことのない研修医も全員が「今後漢方薬を処方したい」と回答した。

研修医が処方したことのある漢方薬は多い順に1. 大建中湯、2. 芍薬甘草湯、3. 五苓散、4. 葛根湯、5. 小青竜湯、6. 抑肝散、7. 麦門冬湯、8. 補中益気湯などであった。

本発表では研修医以降に漢方診療を実践していくための卒前教育、また研修医に対する漢方医学教育について、先行研究も踏まえ議論できればと考えている。

## 2. 卒後研修医教育における漢方処方の意義

NPO法人MMC卒後臨床研修センター長/伊賀市立上野総合市民病院 副院長 櫻井 洋至

### 略歴

1988年3月 三重大学医学部卒業  
1988年6月 三重大学医学部附属病院第一外科・研修医  
1992年1月 三重大学医学部附属病院第一外科・医員  
1999年3月 市立伊勢総合病院外科・医長  
2004年9月 三重大学医学部附属病院一般外科・助手  
2006年1月 三重大学医学部附属病院肝胆膵外科・講師  
2008年7月 三重大学大学院医学系研究科生命医科学専攻環境社会医学講座・講師  
2011年2月 三重大学大学院医学系研究科生命医科学専攻基礎医学系講座・准教授  
医学看護学教育センター 副センター長  
2011年6月 臨床研修・キャリア支援センター 副センター長 (2017年3月退任)  
2015年3月 NPO法人 MMC卒後臨床研修センター事務局長 (現、センター長)  
2018年4月 三重大学医学部附属病院病院教授  
2022年4月 伊賀市立上野総合市民病院 副院長  
現在に至る

### 学会専門医等

日本外科学会認定医・指導医  
日本消化器病学会専門医・認定医  
日本肝臓学会専門医・指導医  
日本消化器外科学会専門医・指導医  
日本癌治療学会認定臨床試験登録医  
日本肝胆膵外科学会高度技能指導医  
日本移植学会移植認定医  
日本医学教育学会認定 医学教育専門家  
NPO法人卒後臨床研修評価機構サーベイヤー  
コンケン大学 (タイ) 国際教授  
コアウイラ大学 (メキシコ) 名誉教授  
三重県医師会 男女共同参画委員  
三重大学医学部医学科カリキュラム委員会 委員長

医学教育モデルコアカリキュラムでは、医学部教育の到達目標に漢方教育が掲載されて久しく、令和4年版では医師として求められる基本的な資質・能力として、「CS:患者ケアのための診療技能 (ClinicalSkills) 患者の苦痛や不安感に配慮し、確実に信頼される診療技能を磨き、患者中心の診療を実践する。CS-02-04-14 漢方医学の特徴、主な和漢薬 (漢方薬) の適応、薬理作用について概要を理解している」こととされている。

一方、臨床研修ガイドライン2023年度版には、到達目標に和漢薬の知識や臨床現場経験の必要性などについて具体的な記載はなく、チーム医療の実践の中で他職種連携の必要性について言及されているものの、集学的治療や統合医療といった概念についての記載は見当たらない。

すなわち、医学部教育と卒後初期教育、専門医教育において、漢方医学教育についてはシームレスな教育が行われていないと考えて良いと思われる。

臨床研修医に漢方医学の知識や経験の機会を提供する必然性がないということは、臨床研修指導医や臨床研修プログラム責任者が漢方医学の意義や有用性をいかに強調したとしても、若い医療者が到達目標の一つとして漢方医学を位置付けることは難しい。必ずしも漢方医学への関心が高くない研修医が、臨床研修期間に必ず遭遇するであろう既存医療での課題解決が困難な患者さんのために自己主導型学習を行って漢方医学を可能性のある選択肢の一つとして捉えることすらできないのではと考える。

将来どのような専門領域に進んだとしても、漢方薬が西洋医学医療の限界や隙間を解決する手段となり得ることは、多くの医師が普遍的に理解していることである。しかしながら、「研修医の間は漢方の知

識がほとんどなくても本当はよいと思っている」、「西洋医学の専門性を持ってしても、臨床でうまくいかない例がたくさんあることを自覚するのを待つしかない」、「研修医の期間は外来研修も決して十分とはいえ、患者ケアの意思決定に必ずしも主体的に携わっているわけではないので仕方がない」、「最先端あるいはエビデンスを踏まえた医療を十分行えたとしても実臨床では全くうまくいかないことがあることに気づくまでは西洋医学だけやっておけば良い」という現状に留まっていることを許容している指導的立場の医師も多いのではないだろうか？

三重県では県下16の臨床研修病院が協働して若い医療者教育を推進しようと活動しているNPO法人MMC卒後臨床研修センターが、臨床研修医に漢方医学に触れる機会を提供しようと以前より漢方教育セミナーを開催しているが、先に述べたような理由により研修医の漢方医学への関心は容易には高まることはなく、期待するアウトカムに至っていない。

3年目の今年は、少なくとも研修医の間にマスターすべき漢方の知識を研修医にどのように教えるか、どこまで教えるかカリキュラム提案を行い、漢方教育文化の推進を目指している。

すなわち、

テーマ：研修医にこれだけは知ってもらいたい漢方

目標：将来どの領域に進んでも頻用される漢方処方により現実的でポピュラーな選択肢として理解できる  
方略：1) 代表的な漢方の頻出処方薬10処方\*について、適応、疾患の病態と漢方の作用機序の理解を

理解する

\*頻出処方案：当帰芍薬散、加味逍遙散、桂枝茯苓丸、呉茱萸湯、当帰四逆加呉茱萸生姜湯、五苓散、八味地黄丸、半夏瀉心湯、大建中湯、六君子湯

2) 中医学の基礎的知識を理解し、臨床応用に直結しやすいパターン形成について、「証スクリプト」の考え方と漢方演習アプリを用いて学ぶ

について提案するとともに、3年間の教育活動について紹介する。

### 3. 鳥取県での臨床研修病院漢方医学教育の取り組み

鳥取県臨床研修指定病院協議会 会長/鳥取県立中央病院 院長 廣岡 保明

略歴

1983年3月 鳥取大学医学部卒業  
 1996年7月 ビッツバーグ大学移植外科（米国）で肝臓・膵臓・腎移植研修  
 2000年4月 鳥取大学第一外科 講師  
 2003年3月 京都大学移植外科で生体肝移植の研修  
 2007年4月 鳥取大学医学部病態検査学講座 教授  
 2019年8月 鳥取県立中央病院・外科（副院長）  
 2020年4月 鳥取県立中央病院 院長

学会活動

1. 日本外科学会
2. 日本消化器外科学会
3. 日本臨床細胞学会
4. 日本臨床外科学会
5. 日本乳癌学会
6. 日本乳癌学会中四国地方会
7. 日本肝胆膵外科学会
8. 日本超音波医学会中国地方会
9. Microwave Surgery研究会
10. 中国四国臨床臓器移植研究会
11. 日本臨床検査医学会中四国支部
12. 鳥取県臨床細胞学会

専門医など

- 専門医、指導医  
 消化器癌外科治療認定医  
 専門医  
 評議員  
 名誉専門医

役職など

- 名誉会員  
 理事 世話人  
 評議員  
 運営委員  
 評議員  
 理事  
 理事  
 会長

医学教育モデル・コア・カリキュラムに漢方医学に関する項目が入り、各大学で漢方医学教育が行われている。鳥取大学においても4年生に講義を行ったり、セミナーを開催しているが、卒後の臨床研修で漢方を利用するか、というと実際には指導医が患者に処方する時にこういう風に使うんだ、程度の理解であり、研修医自ら漢方を積極的に使用しているとは言い難い。

このような現状を改善し、研修医の段階から漢方の臨床をもっと理解する事を目的に、昨年度より鳥取県臨床研修指定病院協議会として漢方勉強会を種々の勉強会やセミナーの1つとして開始した。協議会事務局（県医療政策課）より各臨床研修指定病院および各院長に勉強会への参加を要請した。講師は県内の医師に依頼し、『研修医がまず知っておきたい漢方薬』の内容で講演して頂いた。基礎的な話では無く、診療ガイドラインに沿った治療をしても症状が改善しない患者に対し、次の一手としての漢方薬について説明して頂いた。研修医からの評判は上々であった。

さて、そのような研修医が漢方に対してどのような考えを持ち、今後どうしていきたいかを知ることは、漢方の臨床教育を進めていく上でも重要であることより、本年度、各病院の研修医（60名）と指導医（40名）に『漢方医学教育に関するアンケート』を実施した。その詳細は当日お示しするが、研修医からは漢方に興味があるのもっと勉強したい、という声が出る一方、指導医からは、研修医への漢方教育は必要であるが、研修内容が多く漢方まで手が回らない、といった意見もだされた。

今後も引き続き、協議会として研修医勉強会の継続実施と共に、指導医への注力も必要であると思われた。



主催 日本漢方医学教育振興財団

後援 厚生労働省 文部科学省 日本医師会 日本東洋医学会  
日本プライマリ・ケア連合学会 日本病院総合診療医学会  
日本漢方生薬製剤協会 神奈川県立産業技術総合研究所

協力 日経メディカル開発